

Internationales Symposium 2000 - Musashi Ranzan / Tokyo

"Vergebung, Wiedergutmachung und Gewaltverzicht: die Verantwortung der Kirchen für Wahrheit, Versöhnung und Frieden in Korea, Japan und Deutschland"

2000年09月15日 Tagesthema: Der Umgang unserer Kirchen mit Opfern und Tätern

罪と和解

鈴木伶子

日本では公の場で個人的な話をするのは慎むべきだとされている。しかし私は、「罪と和解」と題するこのスピーチを、私自身が一方的に許された二つの経験を話すことから始めたい。

1960年、大学生のときにフランスで行われた WSCF の会議に参加し、そこで一人の韓国人学生に出会った。彼は、会議の最終日に私に長い話をしてくれた。彼は、日本の植民地下で家族が迫害されたこと、そのために自分は日本人を憎んでいたが、WSCF の会議に参加することになったときに、一生自分が日本人を憎んで生きることはキリスト者として耐えられないと思い、フランスで会う日本人を許することができるようにと熱心に神に祈って参加したことなどを語り、最後に「イエス・キリストのゆえに、あなたを許す」と言ってくれた。

そのころ、日本の学校では、日本の戦争被害と戦争放棄のことは熱心に教えていたが、日本の加害については何も教えていなかったのだから、私は非常なショックを受けた。自分が加害者であるという認識と、罪の自覚もない本当に無知な自分が一方的に許されたという経験は、あまりに大きく辛いもので、その後、会議の他のことは覚えているのに、その学生の名前を忘れ、長い間思い出すことが出来なかった。心理学者のいう防衛反応であろう。

しかし、この経験は私の人生を決定した。教師として、また YWCA 会員として、正義と平和のために活動するようになったのは、学生時代のその出会いの結果であった。

もう一つの出会いは1991年に起こった。若い人を連れて韓国独立記念館に行く車の中で、私は、自分がなぜ韓国の問題に関わるようになったのかを話していた。一つは、先の学生時代の出会い。もう一つは、私が生まれた1938年9月10日と言う日が、朝鮮長老教会が神社参拝決議を強制された日なので、その償いをするのが自分の使命だと思っていること、などを話していた。

すると、それまで黙って運転していた女性が、突然、「許しましょう」と言い、続けて「私

は朱基徹（チュ・キチヨル）の孫です」と言った。私は仰天した。朱基徹牧師は、神社参拝決議を断固拒否して獄死した有名な牧師である。神社参拝が決議された日の夜、逃亡を進める教会員に対し、朱基徹牧師は「主なる神を否定して生きていくことは出来ない」と語り、教会員は祈祷会をして牧師を送り出したが、その有様はゲッセマネの園のようだったという。

私が「あの神社参拝拒否の朱基徹牧師ですか」と尋ねると「そうです」という答えであった。尹命善（ユン・ミョンソン）と名乗るその女性は、次のパーキングエリアに車を入れると、私を抱きしめ、「これで私は日本を許すことができる」と言った。彼女は祖父を殺した日本を憎み、恐れていて、日本嫌いとして有名であったが、私に会うしばらく前に、日本に立ち寄る機会があった。大阪で案内の友人に勧められるままに神社に入り社殿の綱に触ったところ、「あなたが先に許しなさい」という声が聞こえ、涙が滂沱と流れて止まらなかった。一体何のことかと不思議に思いながら、韓国に戻って、神に「あの声があなただの声であったなら、徴を見せてください」と祈っていたところ、YWCA から日本人を案内するようにと依頼があり、もしやと思って来たと言う。私は言う言葉を知らなかった。今、尹命善さんは私をオンニ（お姉さん）と呼んでくれる。

ここでも、私は神の不思議な導きの下で、無条件な許しを一方的に与えられた。この二つの経験、償いようのない罪を一方的に無条件に許されたと言う経験が、私を導き、支え、生かしてくれている。

朝鮮キリスト者が神社参拝に対して命がけで抵抗していたときに、日本のキリスト者は、朝鮮キリスト教会に、神社は宗教ではないから参拝してかまわないと言い、朝鮮キリスト者を死に追いやった。

神社は宗教ではないという論理は、明治以来、天皇を神とするために日本政府が巧妙に作り上げた詭弁であった。日本人の中に根強く存在する「家」へのアイデンティティや、祖先崇拜の念を巧妙に利用することで、信教の自由に抵触しないようにカモフラージュし、国家神道という天皇家の祖先礼拝を国民全てに強制し、天皇のために国民を戦争に駆り立てることが出来た。

当時の日本のキリスト者は、「天皇と神とどちらが上か」という問いに対し、天皇が上とすることを注意深く避けて自分の信仰を守ろうとしていたと思う。しかし、そこで神社は宗教ではないと「ちょっと譲った」つもりなのが、実は、猛獣の赤ん坊を家の中で飼い始めたように、やがて自身の破滅をもたらすことになるのだった。

丸山真男氏によれば、欧米の近代化が個人の信仰や思想を公権力から分離することによって始まったのに対し、日本の近代化では、私的なものは国家的意義に結びつけることによって意義付けられ、結果として公が個を収斂することになった。その時に利用された論

理が「和」であったという。¹

日本では、「和」とか「一体」と言う言葉が美德とされている。夫婦一体、君臣一体、内鮮一体など、本来、異質のものを一体化することが美しいとされる。しかし、その一体化は、常に強者が弱者を支配し、弱者が強者に絶対服従することであった。夫婦一体とは、三従の教え²により妻が夫に完全服従することであり、君臣一体とは、天皇のために国民が無条件に命を投げ出すことであり、内鮮一体とは、朝鮮民族の主体性を奪い奴隷とすることであった。「和」「一体」というまやかしの美しい言葉を使いながら、異質の存在を許さず、相手の自由を奪い、奴隷化するものである。それは徹底した支配と服従の縦社会である。個が確立されていない日本社会で、日本人は、強者に一体化することで自己実現の幻想を抱いたり、上に這い上がろうと努力したり、他人を蔑視することに満足して生きてきた。それは、明治時代も現在も大きく変わっていない。

かつて日本のキリスト者は、十字架にいたるまで自らを低くして人間を救う神と、国民全てを犠牲にしても頂点に立ち続けようとする天皇という全く正反対の「神」を、巧妙に並べることにより、「あなたには私の他に神があってはならない」という戒めを犯した。十戒の最初の戒めを犯して神との関係を破った結果、殺してはいけない、姦淫してはいけない、盗んではいけない、など後半の戒めを犯し、隣人に対して罪を犯した。

しかし、教会も含め、国民すべてが大日本帝国という船に乗って同じ方向に進んでいたことに加え、国家神道という宗教に絡めとられていたため、神を裏切り、人を殺した罪の意識を持たない人が多いのが日本の現実である。

今の日本の状態を見ていると、半世紀以上前に戦争に突入していった時と同じ状況が起こっている。再び「天皇を中心にした神の国」³の一員として、自分が優位に立ち、もっと豊かになり、もっと強くなり、周りの人や国を支配し、神と隣人に罪を犯す道を進む恐れがある。再び私たちの信仰が問われている。

初めに話した韓国の友人たちは、家族を殺された苦しみ、怒り、憎しみを乗り越えて「主イエスによって許す」と言った。人間の気持ちや意志だけでは到底許すことが出来ないことを、イエス・キリストゆえに許してくれたのである。その基には神の許しがある。神ご自身が、ご自身は何一つ罪を犯されないのに、十字架につけられて罪人の姿で殺された。それは、私たちが罪のために滅びないようにと、私たちを生きるようにさせるためであった。イエスは自分を十字架につける人のため「この人たちを許してください、何をしているのか分からないのですから」と祈られた。この常識を超えた許しは、繰り返し背く私たちに対し、なおも神は私たちが滅びることを望まず、許してくださったことの現れである。神ご自身が命がけで私たちを許し、生かしてくださったということを知るとき、私はここでも言葉を失い、ただ圧倒されて膝まずく。

このようなイエスによる許しと、イエスに倣って許してくれた友に出会いながら、なおも、私たちが国家権力という時代の流れに寄り添って生きていくことは、あの韓国の友人の許しを無にすることであり、命をかけたイエスの愛を裏切り、イエスを再びゲッセマネの園と十字架に追いやることである。現在、日本は再び軍事大国になって近隣諸国を脅かし、経済大国として世界の人の命を奪っている。同じ罪を繰り返したのでは、罪の告白と許しの意味を失う。神を否定し隣人を殺すと言う罪を再び犯さないよう、日本と言う自分の国だけではなく世界の状況の中で判断することと、今の状況に流されずに過去の歴史から学びながら終わりの日に主の御前に立つことを覚えること、世界と歴史と言う二つの座標軸の中で、生きていきたいと願っている。

SUZUKI Reiko, 1938, Tokyo Japan.

Studied at Tsuda-College Tōkyō.

“Pilgrimage to Hiroshima”.

Moderator of National Christian Council in Japan (NCCJ).

Member of Yoyogi-Uehara-Church (Kyodan).

¹ 丸山真男「超国家主義の論理と心理」(「世界」1946年4月号)

² 三従の教え 父の家にありては父に従い、夫の家に行きては夫に従い、夫死しては子に従う。
(貝原益軒「女大学」)

³ 森喜朗首相 2000年5月15日の発言